

A 福島県コース「現地を訪問して想うこと」

2003年文学部卒業 奥野みち子

福島県コースのグループは、一日目は郡山駅前から貸切りバスで、東日本大震災による福島第一原発事故により帰宅困難地域に指定された浪江町とその役場、次に、原発事故後は東電の対応拠点となっている楡葉町のJヴィレッジ、そして、いわき市にある「ホテルハワイアンズ」を訪問した。二日目は、いわき市にあるトマト栽培の「あかい菜園」と水族館「アクアマリン福島」を訪問した。コースの参加者は各施設で、大地震時の被害状況とその後の対応、現在の状況に関する講義を受けた。

「ホテルハワイアンズ(旧常磐ハワイアンセンター)」は、日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した「フラガール」(2006)の舞台として知られている。夕食後に鑑賞した「ハワイアンショー」では観客の多さに圧倒され、また、男性ダンサーたちによる「サモアの火の踊り」の迫力に驚嘆した。ホテル到着後にホテル支配人から受けた講習では、東日本大震災時は宿泊客と日帰り客を合わせて2,300名のお客様がいたが、「緊急対策本部」を設置してバスを確保するなどして、無事にお客様を帰宅させたという。1ヶ月後には本震を上回る余震発生でホテルは営業不能となったが、200日余の休業中に地域に大浴場を開放し、二次避難所としてホテルの宿泊と食事を家族単位で提供したという。「ホテルハワイアンズ」では大震災前より宿泊客と日帰り客が増加していると知り、顧客と地域住民を大切にするホテルの方針が現在の盛況につながっていると感じた。「アクアマリン福島」は大震災で9割の生物を失うという壊滅的被害を受けたが、関係者の努力により4か月後に開業した。しかし、現在は放射能による風評被害で、以前の7割弱の入館者数を維持するにとどまると知った。「アクアマリン福島」は、大震災前は「ホテルハワイアンズ」との相乗効果で大いに賑わっていたと知ると、参加型的水族館というユニークな方針は以前の活況を取り戻す鍵になると思っている。

放射能被害に関しては、ツアーのバスが浪江町に近づくにつれ、通過する車の大半は放射能除染作業用車両で、さらに、除染土を入れた黒い袋が並ぶ場所が目立ち始めたことで、放射能の存在を実感した。浪江町役場の説明によると、現在、浪江町の除染実施率は森林と道路は30~40%、宅地と農地は20%と、安全な生活環境には程遠い。しかも多くの住宅がネズミの被害に会い、惨憺たる状況だという。浪江町役場はふるさと再生を目指して奮闘しているにも関わらず、住民調査では戻りたい人は約18%だという。ゴーストタウン化した浪江町を見て、このまま荒廃が続けば、町の再生は難しいと感じた。

浪江町を訪問したことで、原発の利用は人類滅亡に関わると認識した。福島原発事故の後、ドイツは原発を撤廃したが、当事国の日本は、原発に代わるクリーンな発電の開発・採用に積極的でない。しかも今はインドに原発を輸出しようとして世界から非難を受けている。原発事故を起こした日本こそ、原発撤廃を宣言して世界の信用を得るべきである。

最後に、東北応援ツアー運営に関わった校友会本部、福島校友会、そして復興支援特別委員の皆様方に、有意義な研修旅行の機会を与えて頂いたことに心から感謝申し上げます。



バスの車窓から見えた、楡葉町の道路脇に並ぶ除染袋。黒い色の大きな袋が放射能の恐ろしさと不気味さを象徴しているように思えた。



Jヴィレッジでは、天然芝グラウンドを含むサッカーフィールド10面は芝生が取り払われ、約千人分の東電社員の宿舎や駐車場となっていた。2019年4月の営業再開に向けて今年7月から除染を始め、東京オリンピックの男女日本代表チームの練習・合宿場として使用するという。



「あかい菜園」ではコンピューターで温度・湿度・水量・肥料を管理しながら、無機・水耕栽培で各種トマトを栽培している。トマトの茎を数メートルもの長さにて育てることで、一年間トマトを収穫できるという。

<http://akai-tomato.jp/>

「あかい菜園」でお土産に頂いた珍しいトマトの詰め合わせ。



浪江町役場に至る常磐自動車道の周辺は、紅葉の真っ盛りで、福島は自然に恵まれた土地だと感じた。

左の写真は、東北応援ツアーの翌日に個人で行った福島県白河市にある「南湖公園」の紅葉。

<http://shirakawa315.com/sightseeing/nanko.html>